

中大スポーツ新聞部

(中大学友会体育連盟機関紙)

初の快挙



前列左から櫻井、高木、高田、
後列左から根立、屋、曾根田、
井上、首藤、佐藤各記者

第5回大学新聞コンテスト・
スポーツ新聞部門
「凸版・レイアウト賞」

主催:東京五大学新聞連盟、関東学生新聞連盟
特別後援:朝日新聞社、日刊スポーツ新聞社

第9回大学スポーツ新聞
コンテスト
「原稿賞」

主催:報知新聞社



見出し、紙面構成
記事、写真
全てが優秀とプロ
に認められた



左から屋さん、曾根田さん

新聞部のエンブレム、取材用のブレザーに付ける

「2冠」に万感 最高の チームだ

手記 曾根田智明 編集長(経4)

大学新聞コンテストの主催は東京五大学新聞連盟、関東学生新聞連盟。朝日新聞社と日刊スポーツ新聞社が特別後援し、昨年12月21日に東京都内で表彰された。

大学スポーツ新聞コンテストは報知新聞社主催。ことし1月11日付のスポーツ報知紙上でまるまる1ページを使って紹介された。以下は曾根田智明編集長(経4)の優勝手記である。



ラグビー大学選手権や箱根駅伝のように華やかではないが、大学スポーツ紙の世界にも全国大会がある。年に2回の新聞コンテストだ。他大学と紙面のクオリティーを競い合う。日本一を目標に据えたシーズン、中スポは2度も栄誉に浴した。

「明スポ」追い越せ！

大学新聞コンテスト表彰式の後、真っ先に声を掛けたい人がいた。同大会最優秀賞(朝日新聞社賞)を受賞し、3連覇を達成した明大スポーツ(明スポ)の坂本寛人編

集長だ。

「おめでとう」と言うと、いつもと変わらない、冷静な口調で「ありがとう」と返ってきた。すごいことをやってのけたのに、少しも気取らないところが彼らしい。

中スポはこの1年間、明スポを相手に「ライバル紙」として追いつけ追い越せと活動したが、明スポはV3。ほかの大学紙を寄せ付けなかった。

審査を行うのは、大手新聞社に勤めるプロの記者たちだ(文末「大会講評」参照)。明スポには及ばなかったにしても、2社から評価を受けたのは中スポとしては1993年の創部以来初の快挙だった。

表彰式では万感胸に迫る思いでひな壇に上がった。

同期8人と後輩が14人。誰一人欠けることなく役割を全うしてくれたから、最高の結果を出せた。スポーツ紙制作をチームスポーツと捉えるなら、活動をともにしたメンバー23

人は最高のチームメートだ。

ペンとカメラで中大アスリートを支える。どちらかといえば裏方だ。主役である体育連盟の選手たちの活躍をいかに伝えていくか懸命に考える。これが中スポの使命。

作り手の私たちも、配役の一人と言えるかもしれない。紙面の質を他大学のスポーツ紙と争う。陸上競技や水泳のような記録系競技と似た性格を帯びる、と言ったら大袈裟か。

仕事人が一丸に

スポーツの試合会場がそうであるように、紙面制作の編集所も戦いの場だ。

整理担当は、各担当記者が書いた記事とカメラマンの撮った写真を専用コンピューターに取り込んで紙面を構成する（レイアウト）。

締め切り時間に追われる。定刻通りに紙面を完成させなければ、印刷ができない。製版時刻ぎりぎりまで校閲を重ねてミスを減らしていく。

取材から始まる限られた時間の中、考えることが多い。どうしたら面白いものができるか、どうしたら読者に親切な紙面になるか。

受賞対象となった131号、132号はもちろんのこと、毎号、頭を抱えて新聞を作り上げてきた。

個人プレーで作れるものではない。新聞制作には、さまざまな仕事人が携わっている。

掲載記事全てを念入りにチェックする主筆、足で広告を取ってくる営業担当。紙面に載る素材の一つひとつが、仕事人たちの努力の結晶だ。

新聞印刷が始まると、すぐさま広報PR担当が発行をSNSで告知。

翌日には、購読担当が指揮を執って読者への発送作業に移る。ありがたいことに年間購読者が多数いる。

新聞を完成させたら終わりではなく、その後の仕事を下支えする人がいる。マネジャー業に奔走する主務や、部のお金を管理する会計、Webサイトの管理担当、連盟組織の渉外担当。

新聞が産声を上げるのとは別のところにも、欠かすことのできないプロフェッショナルがいる。

悔しさと幸せと

歯車はうまく回っていたと思う。中スポは間違いなく最高のチームだった。だが、なぜか悔しい。ふと思いついた言葉があった。

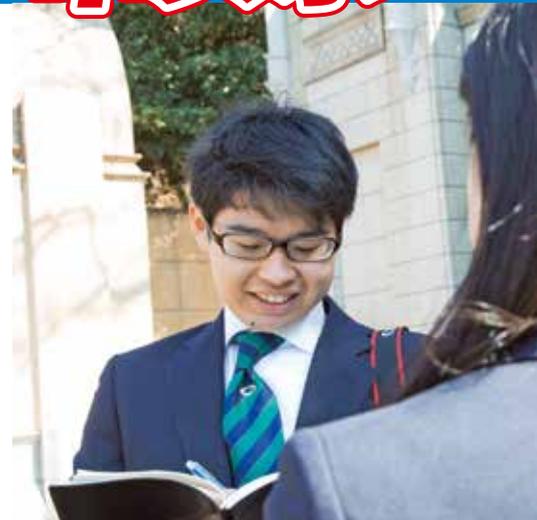
「優勝しなかったヤツには、後悔しかないじゃないですか」

高校チャンピオンとして鳴り物入りで中大入りしたレスリング部選手の一言だ。けがに苦しみ、とうとう一度も結果を出せないまま引退試合を終えた、そのとき。目に涙を溜めて語ってくれた言葉。

日本一になれなかったのは、どこかに甘えがあったからではないか、努力が足りなかったのではないか。そう考えたら、「後悔しかない」のかもしれない。

ライバル紙に勝つことだけが目的ではなかったが、中大アスリートの活躍を伝える中スポが、日本一の新聞であったなら、それ以上のことはないだろう。

活動から引退する3年生（当時）9人にとっては、後輩たちに希望を託すしか選択肢がない。最高のチームに恵まれた中スポ生活を思えば、後悔があるとはいえ、幸せ者だったと切に感じる。明スポに負けなく



Cマーク入りネクタイ、こちらも取材用の正装だ



らい幸せだったかもしれない、と勝手に思っている。

新聞コンテスト表彰式終了後。各大学の仲間と懇談した。慶大、法大の各編集長。明大、東洋大、早大の記者数人。

坂本君もいた。明大部員による3連覇祝勝会があっただろうに、なぜ我々の集まりに来たのか。不思議に思いつつ、また、うれしく思いつつ話し合った。

隣の席に座った坂本君に、「写真でも記事でも、とうとう勝てなかった。やっぱり明スポはすごいや」と思いの丈をぶつけた。

「そんなことないよ」。返答はいつも通りの冷静な面持ちでそっけない。このとき確信した。彼もまた、

最高のチームに恵まれた、まぎれもなく幸せ者の一人だ。

大学スポーツ新聞は選手らのグッドニュースを報じる一方、紙面には現れない記者・カメラマンの幸せも印刷されている。

大会講評

報知新聞社は主催した「第9回大学スポーツ新聞コンテスト」を1月11日付紙面で詳報した。全国から14校が参加した同コンテスト。「原稿賞」の中大をこう記述した。

『他を圧倒する関連原稿の充実度と企画力を示した中大は本紙デスクからも「記録の見せ方、略歴、裏話などかなり高いクオリティー。お手本になる』



第5回
大学新聞コンテスト
「凸版レイアウト賞」

賞は「原稿」「写真」「レイアウト」と3部門あり、詳報記事中、『各賞寸評』でも高い評価をいただいた。

【原稿賞・中大】『企画、内容ともクオリティーが高く、申し分なし。書き出しの描写、舞台裏のエピソードなど、読み手の立場を考え、どうしたら読ませることができるとか、よく工夫されている』

参加大学は以下の通りだった。中大、青学大、東洋大、帝京大、中京大、びわこ成蹊スポーツ大、同大、立命大、京産大、龍谷大、近大、大體大、関大、関学大。

中大スポーツ第24期（当時3年生）メンバーと担当

名前	学部	担当	出身高校
屋 仁美（おく・ひとみ）	総政	主 務	中大高
井上 健太（いのうえ・けんた）	法	定期購読	東京都市大付高
櫻井 勇輔（さくらい・ゆうすけ）	文	営業、機材	中大付高
佐藤 広崇（さとう・ひろたか）	文	広報、PR、WEB、機材	中大杉並高
首藤沙央里（しゅどう・さおり）	経済	主筆、編集補佐	札幌南高
曾根田智明（そねた・ともあき）	経済	編集長、学年主任	聖徳学園高
高木 伸代（たかぎ・のぶよ）	法	会 計	和洋九段女子高
高田 遥介（たかだ・ようすけ）	法	主筆、連盟	桐蔭学園高
根立 真衣（ねだち・まい）	法	営業、記録	中大付属横浜高

年6回、毎号1万部超

通称・中スポ。1993年創刊。中大公認の唯一の学生スポーツ紙として年6回、毎号1万部以上を発行している。関東大学スポーツ新聞連盟加盟紙。発行元は体育連盟所属の「中大スポーツ」新聞部。学生主体で取材、営業活動、紙面製作をこなす。部の目標は「ペンで体連生を応援する」



第9回 大学スポーツ新聞 コンテスト 「原稿賞」